

**精神分析入門(下)フロイト** 新潮文庫 20060525オオシカトモコ  
**第 26 講 リビドー論とナルシズム p.137〜p.163**

### 性の欲動と自我の欲動

性の欲動は形式上、自我の欲動に服従し、対抗によって満足を得るが、征服され得ない。性の欲動は、自我の欲動より緊密に、不安という情動状態に結びついている。それに対し飢えと乾きという基本的な自己保存欲動は、決して不安には変わらない。

性の欲動と自我の欲動の区別は動かし得ないものだが、両欲動の本質的な差異は十分に把握できず、我々にとっては、単に個体のエネルギー源に対する名称としてある。リビドーという名称は、性愛生活の原動力とするのが正しい。精神分析にとって、その分離を正しくはっきりしておくかは、重要ではないし、それを論ずる資格もないが、生物学にとっては重大な意味を持つであろう。性愛こそは、個体を超えて個体を種族に結びつける生体の唯一の機能である。異常に高度な快感を与える変わりに、生命を脅かし個体を危険におとし入れる。個体は、性細胞の短命な付属物であり、自分の死後にも残る世襲財産の仮の所有者のごときものにすぎない。

感情転移神経症→性の欲動と自我の欲動(独立の個体としての自我と世代系列の一環としての自我)との争い。神経症は、人間のリビドーが極度に強く発達した結果であり、他の動物と違う人間の天賦の能力の反面である。自我がその性的対象に向けたエネルギー充当を「リビドー」と名付け、自己保存の欲動から送り出される他の全てのエネルギー充当を「関心」とした。しかし自我の構成機能の実体は他の神経症的障害の分析から洞察を得られた。

### ナルシズム

1908 年、K・アブラーハムは、精神分裂病の主要な特徴は、対象へのエネルギー充当が行われないことを発表した。リビドーが自我に向かって引き返す、反射的な方向転換が誇大妄想の源泉→恋愛対象の過大評価になぞられる。リビドーが対象を捨て、自我自身を持ってこれに代える、このような対処法をナルシズム(自己愛)と名付ける。P・ネッケの倒錯から借用。このナルシズムは一般的であり根元的。自体愛の能力が、現実原則に従わせる教育において性愛の発達の遅れる根拠となる。リビドー処理のナルシズム的段階における性活動である。

アメーバの例え。

睡眠状態→リビドーの配分の原始状態、完全なナルシズムの回復。

### 完全な恋愛

ナルシズムはエゴイズムにリビドーを加えたもの。対象欲求が非常に乏しい場合、エゴイスティックであり、同時にナルシズム的であり得る。このことは、直接の性的満足か、「愛」と呼ぶ傾向において起こる。エゴイズムは恒常的で、ナルシズムは変化しうる、エゴイズムの反対の利他主義は、性的満足を追求しないが、完全な恋愛の状態では、これが一致する。性的対象は自我の持つナルシズムの一部を自分の方へ引きつけ、対象の「性愛的過大評価」として注意をひく。さらにエゴイズムが性愛対象へ引き渡されると、性的対象は自我を吸い込み極めて強力なものになる。

ゲーテの詩、「ズライカ」と「ハーテム」\*

夢の成立(補足)→抑圧された無意識が、自我からある程度の独立を確保した結果として、睡眠願望には服さず、その充当を続ける、と仮定しなければならない。

器官の疾患は結果的にリビドーを対象から引き離す。→心気症:病気とは認められないのに、ある器官が病気と同じ仕

方で自我を捉えてしまう。

### 現象領域

何故、あくまでリビドーと関心、性の欲動と自我の欲動を区別するのか？それは感情転移神経症の洞察の結果として必然だった。また、対象リビドーを自我リビドーに転換できるという仮定は、精神分裂病をヒステリーや強迫神経症と比較説明できる唯一の仮定であると思われる。分析の結果でない唯一の主張は、リビドーは対象に向けられようと自我に向けられようと、リビドーであることに変わりなく、利己的関心には転化しないし、逆に利己的関心がリビドーに転化することもない、ということである。

対象リビドーの自我リビドーへの転化が正常な過程であるとすれば、何故、リビドーが対象から離れることを、病的状態の源泉として扱うのか？ある一定の非常に力強い過程が、リビドーを対象から引き離す場合、ナルシズム的になったリビドーは、対象へ戻る帰り道を見いだすことが出来ない。この過程は抑圧過程と近い。ナルシズム的リビドーはある程度以上の鬱積には耐えられないので、自我は病気にならないためにリビドーを外へ送り出す。→対象充当  
ヒステリーの場合も、同じ諸力の葛藤であるように見える。症状を形成させる決定的な固着は、おそらく、原始的自己愛の段階にある。自己愛的神経症はリビドーの固着箇所が、ヒステリーや強迫神経症よりもはるかに早期にさかのぼった段階にあると仮定せざるをえない→同一の現象領域

### 精神分裂病の症状像

再び対象に到達しようとするリビドーの努力に還元されるような諸現象、快復、治癒の努力。それは奇妙で騒々しく、ヒステリーの症状、まれに強迫神経症のそれと似ているが、あらゆる点で違っている。

精神分裂症の場合、リビドーは対象を捉えようと努め、何かを捉えるが、それは対象の影に過ぎない。→対象に所属する言語表象。自己愛的神経症は、感情転移神経症の場合に役立った技法では、抵抗を克服できず対処できない。両者の一致した点はかなりあるが、別の方法が必要である。

### パラフレニー

パラフレニーはパラノイアと精神分裂病を総称する。パラノイアの諸形態は、誇大妄想、恋愛妄想、嫉妬妄想などなど。被害感覚から自分が重要であるという推論→誇大妄想が生じる。パラノイアは、リビドーの対象への充当が引っ込められたことによる自我拡大の直接的な結果であり、二次的ナルシズムである。

圧倒的多数の症例で、迫害者は被迫害者と同性であった。また、若干の例で、患者が正常だった頃に愛していた同性の人物が迫害者になってしまう。後の妄想の発展により、明らかな親近性にもとづき、別の人物に置き換えられる。迫害妄想パラノイアは、同性愛的な欲動に抵抗するための形式であろう。情愛が憎悪に転化するのは、抑圧過程の通例の結果であるリビドーの興奮が、不安に転化することに対応している。

若い医師の症例と、若い娘の症例

### 同性愛的な対象選択はナルシズム的

対象選択:ナルシズムの段階のあとにくるリビドー発達における進展のふたつの型→自我に似たものが表れるナルシズム型、または、生活欲求を満足させてくれ、リビドーの側からも対象に選ばれる依存型、のいずれかに従う。

妄想と強迫観念との差異は、抑えつけられている無意識との関係、両方の疾患の生ずる局所と力動性の差異からきて

いる。

### メランコリー

メランコリー患者の自責は、彼らが見失い、無価値になった性的対象に向けられている。リビドーを対象から引き上げ「ナルシズムの同一化」の過程によって、その対象は自我そのものに投影されている、と推論できる。自我は放棄された対象であるかのような扱いを受け、その対象に向けられるはずであったあらゆる攻撃と復讐の宣告を受ける。ここにも、両価性(アンビバレンツ)な感情生活の特徴が出ている。メランコリーの周期的な循環性、この中間時期に分析治療を行うことによって両極の状態に戻ることを予防できる。これによっても、メランコリーや躁病も、神経症の前提である葛藤解決の特殊な仕方のひとつであることがわかる。

### 注察妄想

我々は、注察妄想の分析から、自我にはあるひとつの法廷が存在し、自我の他の成分をたえず監視し、批判し、比較し、目を光らせていると推論した。患者の思い違いは、この不愉快な力を外界へ移し置いている点である。彼は理想自我を基準として判定している、と感じている。この理想自我の樹立は、第一次幼児性自己愛に結びつき、以来、多くの障害と侵害をこうむった自己愛を回復しようとする意図の結果である。

注察妄想は、この法廷(:自我の検閲者:良心)が、両親、教育者、社会環境の影響のもとに出来上がったもので、これらの模範の一人一人と、自分との同一化に由来するものであることを暴露してくれる。

### 不安とリビドー

未来、もし病因的な作用をする能力が、リビドー性の欲動の特権であることが明らかになり、結果、リビドー論が全戦線にわたって勝利を祝うことが出来ても不思議ではない。我々は、世界の現実、すなわちアナクレー(運命・必然)に従属させられることに反抗するのが、リビドーの性格的特色であることを知っているから。

不安感情がエゴイスティックな自我の欲動によってではなく、自我リビドーによって作られるものだとすると、その不安状態は、逃走であれ防衛であれ、自己保存に役立つ行為を妨害する。現実不安の感情部分を自我リビドーに帰し、その際の行動を自己保存の欲動に帰せば、我々はあらゆる理論的難点を除去したことになる。

\* ゲーテ 66 才 1815 年作、『西東詩集』の「ズライカ」はズライカ(マリアンネ)とハーテム(ゲーテ)の相聞歌の形式をとってふたりの恋愛を歌った。マリアンネが書き、ゲーテが手をいれた。

“ Narcissus “ Caravaggio

